

【第2章】

悪戦苦闘の住民たち

「そろそろ収穫と思つてたトウモロコシが何者かに食われた!」「スイカが割られて食い散らかされた!」

ネットを作物に直接被せる人、竹を切つて支柱にし、漁網で畑を囲う人、侵入場所と思しき山際にトラロープを張る人。

みんな、考え付く対策を取り始めたけど被害は止まらない。

ワイヤーメッシュ柵を自作で作る人や見様見真似で電柵を設置する人もでてきた。

それでも被害はひどくなるばかり:

そしてついに田んぼのイノシシ被害まで出始め、とうとう作付けをあきらめる人も出てきた。

集落のあちこちにセイタカアワダチソウやススキの繁茂する耕作放棄地が増え始めた。

【第3章】

雅ねえの毒舌炸裂

そして、集落に雅ねえがやってきた。

村人たちは口々に自分たちがやってきた対策が効果がなかったことを説明し始めた。

「ネットも張つた、電柵もトタンもやってみたけどダメやった!」「苦勞してワイヤーメッシュも設置した、赤いピカピカ光るライトも買ったけど、何やっても突破される!」

おばちゃん、父ちゃん、じいちゃん、ばあちゃんたち、集まった人々の愚痴に丁寧な耳を傾け、うなづきながら聞いていた雅ねえがある村人のひとことに反応した。それは

「何をやっても突破される、動物は賢い。」の一言。

「何を言うてるの?、動物なんかちいーとも賢いことない、あんたらがアホなだけや、何が起きてるのか考えもしてない。こんな気休めの柵、対策でもなんでもないよ。けどこの集落見込みある。やらんといかんこと何もやってないんやから。」

でもフォローも忘れない。「ここは、すぐく大事な成功するための条件がそろつてから安心して。あたしも全力で応援するわよ。」

そして、村中で一番被害のひどい畑をモデル園にして、その畑で何度か勉強会をやつて、みんなで被害の止め方を学ぶことになった。

物語は尻切れトンボのまま、ここまでです。

【大崎町のあなたに】

さて、こんな尻切れトンボの物語なんだけど、大崎町のあなたはどんな気持ちで読んだかな?

もし、あなたが「集落ぐるみで餌付けすれば獣害増えたり前、あーっ、もう、私が行つて教えてあげたい!」ってイライラしながら読んだなら獣害対策のこと勉強できて人。

「この物語って何を言いたいんかなあ、さっぱりわからん」っていう人は、野方活性化センターであと何回かある研修会、参加してみて。

それから、あたしがフォローした成功する条件って何かわかつたかな?

それはね、ばあちゃんや母ちゃんたち女性が集まつてること、そして、やれ駆除だ、柵の補助金だと騒ぐ人がいない、自分で被害止めたい人ばかりつてところだよ。

次回は鳥の話だよ~



講師紹介 **井上 雅央氏**

1949年、奈良県出身。

愛媛大学大学院農学研究科修士課程修了、京都大学博士(農学)。

元農研機構 近畿中国四国農業研究センター鳥獣害研究チーム長。

退職後、同センター専門員。宮崎県、熊本県、広島県、静岡県などでアドバイザーとして継続的に活動。

著書に、『これならできる獣害対策』『山の畑をサルから守る』『山と田畑をシカから守る』『60歳からの防除作業便利帳』『ハタニ』『女性がすれぱずんずん進む獣害対策』(いずれも農文協)など多数。

